

ユニット5：仏教

このユニットのねらい

東南アジアの人々が受容した物語という視点から仏教を見直す。例として、仏伝（ブッダの悟りに至る生涯）を語るビルマの写本、ジャータカ（ブッダの前生での活躍）を語るボロブドゥールの浮き彫りなどを取りあげる。ここから仏教が受け入れられた理由の一つが、ブッダの「波瀾万丈」な活躍にあったことを理解する。

『宝物集』のラーマーヤナのキーワード

- ・ 非戦・不殺生の思想 (ahimsā)、布施の思想 (dāna)、菩薩 (bodhisattva)

東南アジアの祝日

- ・ 別紙を参照

仏教の出現

- ・ 前5世紀頃、現在のネパール南端、カピラヴァスツ
- ・ シッダールタ
- ・ ブッダ (Buddha 仏陀)
- ・ ガウタマ (ゴータマ)
- ・ シャカ族の尊者>釈尊

仏教の教え

- ・ 四聖諦：苦集滅道
- ・ 諸行無常、諸法無我
- ・ 宗教組織としての仏教 三宝：仏法僧

仏教の発展

- ・ 仏教の発展は積層型
初期仏教→部派仏教 →部派仏教（最大 20 派）
上座部 (Theravāda)
有部 (「小乗仏教」)
大衆部など
→大乘 (Mahāyāna) 仏教→密教 (Tantric Buddhism)

東南アジアの時代区分

1. 部派仏教・大乘共存時代
 - ・ 東南アジアへの初期の伝播 別紙参照
 - ・ 密教はもっとも先端的な大乘仏教
 - ・ ボロブドゥール：部派仏教・大乘・密教
2. 大陸部：上座仏教時代
 - ・ 上座仏教：南伝仏教（スリランカ） 13 世紀以降
 - ・ 島嶼部では 16 世紀以降、イスラームの時代

上座仏教と大乘仏教の違い

- ・ 上座：パーリ語
- ・ 大乘：サンスクリット、漢訳、藏訳
- ・ 上座：先人としてのブッダ、仏陀、菩薩は歴史的存在
- ・ 大乘：超越者としてのブッダ、仏陀、菩薩は過去、現在、未来に無数

仏教の物語

- ・ 主人公：仏陀・ブッダ (Buddha) と菩薩・ボーディサットヴァ (Bodhisattva)
- ・ 行動のテーマ：智慧（自らの悟りを目指す修行）と慈悲（他者の救済）、自利利他
- ・ 背景：輪廻（りんね）転生、その対極としての解脱
- ・ 生誕（ルンビニー）、出家と修行、成道（ブッダガヤー）、布教（サールナートで初転法輪）、入滅（クシナガラ）

東南アジアの祝日

インドネシアの祝日 2010 年

1 月 1 日 (金) 西暦新年
 2 月 14 日 (日) イムレック (中国暦 2561 年新年)
 2 月 26 日 (金) マウリッド (ムハンマド生誕祭)
 3 月 16 日 (火) ニュピ (サカ暦 1932 年新年)
 4 月 2 日 (金) 聖金曜日 (キリスト受難祭)
 5 月 13 日 (木) キリスト昇天祭
 5 月 28 日 (金) ワイサック (仏教大祭: 仏陀の生誕、成道、入滅)
 7 月 10 日 (土) イスラ・ミラジュ (ムハンマド昇天祭)
 8 月 11 日 (水) 《ラマダン (断食月) の始まり》
 8 月 17 日 (火) インドネシア共和国独立記念日
 9 月 10 日 (金)・11 日 (土) イドル・フィトリ (断食明け大祭)
 11 月 17 日 (水) イドル・アドハ (犠牲祭)
 12 月 7 日 (火) イスラム暦 1432 年新年
 12 月 25 日 (土) クリスマス (キリスト生誕祭)

タイの祝日 2010 年

1 月 1 日 (金) お正月
 (2 月 14 日中国旧正月)
 2 月 28 日 (日) マカブーチャ (万仏祭)
 4 月 6 日 (火) チャックリー記念日
 4 月 13 日 (月)～15 日 (木) ソンクラーン
 5 月 1 日 (土) レイバーデー ※一般企業のみ
 5 月 5 日 (水) 戴冠記念日
 5 月 13 日 (木) 農耕祭 ※官公庁のみ
 5 月 28 日 (金) ヴィサカブーチャ (仏誕節)
 7 月 26 日 (月) アサラハブーチャ (三宝節)
 7 月 27 日 (火) カオパンサー (入安居) ※官公庁のみ
 8 月 12 日 (木) 王妃誕生日
 10 月 23 日 (土) チュラロンコン大王記念日
 12 月 5 日 (日) 国王誕生日
 12 月 10 日 (金) 憲法記念日
 12 月 31 日 (金) 大晦日

ほかにカンボジア、ラオス、ミャンマー、シンガポールも仏教関係の祝日あり。

義浄『南海寄帰内法伝』巻 1 (7 世紀唐代)

「(南海では) 多くこれ小乗。ただ末羅遊に少し大乘有るのみ。」

義浄『根本説一切有部百一羯磨』巻 5 (唐代)

シュリーヴィジャヤ (スマトラ島南部) では仏教が盛んで千人もの僧侶が学んでおり、その様はインド本国と変わらない。中国からインドへ向かう者はここで勉強してから西へ進むのがよい。

東南アジアでは根本説一切有部、正量部、大衆部、上座部、大乘 (スマトラ) が盛ん。

参考文献

小林正典, 三友量順『ブッダの生涯』(とんぼの本) 新潮社, 1990.

中村元『釈尊の生涯』(平凡社ライブラリー) 平凡社, 2003.

中村元, 田辺祥二『ブッダの人と思想』(NHK ブックス) 日本放送出版協会, 1998.

安田治樹『図説ブッダ』(ふくろうの本) 河出書房新社, 1996.

「ブッダの生涯」

http://www.actv.ne.jp/~yappi/tanosii-sekaisi/02_indo&SAasia/02-04_buddha.html

『ジャータカ』の伝播と変容 ver 2.0-20110129

I 仏教のブッダ観:ブッダとは何か?

ブッダをどのように理解するかは、仏教にとって核心的な問題の一つであり、仏教の歴史的変化とともにその理解も変わってきた。この問題は仏教内部では仏身論と呼ばれる。

1. 一仏主義、歴史的ブッダ:初期仏教から上座部仏教の流れ

- 1) 釈迦牟尼(Sākyamuni). ゴータマ・ブッダ(Gotama Buddha).
- 2) 歴史的に一度だけこの世界に出現した人間。→「仏伝」
- 3) ブッダになるまで、菩薩として無数の生をくりかえした。→「ジャータカ」
「ジャータカ」は、ブッダの生き方を理想のモデルとするブッダ崇拝の一部である。したがって、(大乘仏教にも伝承されているが)上座部仏教において重要な位置を占める。

2. 神格化されたブッダ

- 1) ブッダに対する信仰の深化→超人的ブッダ観。「仏伝」の神話化と「ジャータカ」の増大
- 2) ブッダのシンボルへの崇拝→仏塔崇拝(ストゥーパ「卒塔婆」). 遺灰, 仏牙.

3. 大乘的ブッダ:多仏主義

前1世紀頃から、在家信者を中心とした新しい仏教運動が現れた。彼らは自らを、ブッダの真の教えに戻る「大乘」とよび、保守的な仏教徒を「小乗」と貶めた。

- 1) すべての人はブッダになる可能性を持っている。すべての人は潜在的に菩薩である。
過去七仏、三世十方世界のブッダ。大乘の菩薩:自利利他。
例:阿弥陀仏(Amitāyus, Amitābha). 法蔵菩薩(Dharmākara)の修行の結果。「報身」としてのブッダ。
例:観(世)音菩薩(Avalokiteśvara). ブッダになれるにもかかわらず、この世界にとどまって人々を救う。
- 2) ブッダが説いた真理は永遠に存在する。その擬人化を「法身(ほっしん)」としてのブッダという。
例:大日如来(Vairocana)。

参考図書(仏教に関するもの)

石井米雄『タイ仏教入門』(めこん, 1991)タイにおける上座部仏教の最良の案内。
中村元ほか『岩波仏教辞典』(岩波書店, 1989年)
水野弘元『仏教要語の基礎知識』(春秋社, 1972年)

II ジャータカの構造:「テキスト」「語り」「物語」

ジャータカの構造を「テキスト」「語り」「物語」という三つのレベルで考える。「ローヒニー・ジャータカ」(J45)と「兎ジャータカ」(J316)を例に取り上げる。

1. 「テキスト」の種類

ジャータカ(jātaka, 本生経)物語とジャータカ物語集。経・律。論。書承と浮彫。

- 1) パーリ語『ジャータカ』。22篇547話。1世紀頃。
- 2) サンスクリット語『ジャータカ・マーラー』(Jātakamālā)35話。2世紀。
- 3) 漢訳『六度集経』91話。2世紀頃。

2. 「語り」の形式

- 1) 現在物語:どのような機会にブッダが物語を語ったかを記す部分。語り手=ブッダ
- 2) 過去物語:ブッダの前生物語。ジャータカの主要部分。散文と韻文からなる。
- 3) 連結:再び現在に戻り、過去物語の登場者と現在物語の人物とを結びつける。登場者の一人は必ずブッダ本人である。

3. 「物語」の思想

波羅蜜(pāramitā):菩薩の基本的実践徳目。布施, 持戒, 忍辱(にんにく), 精進, 禅定, 智慧。

参考図書(ジャータカに関するもの)

岩本裕『インドの説話』(紀伊國屋書店, 初版1963, 復刻版1994)インド起源の仏教・非仏教説話の日本とヨーロッパへの伝播を解説。専門的だが読みやすい。
中村元・監修『ジャータカ全集』全10巻(春秋社, 1982-91年)パーリ語ジャータカの完訳。
干潟龍祥『本生経類の思想史的研究』(山喜房仏書林, 1978年)ジャータカの専門的研究書。
干潟龍祥『ジャータカ概観』(春秋社, 初版1961年。改訂増補版1981年)上記の普及版。

III ウサギ本生物語の伝播と変容

ウサギ本生物語を例にとりて、インドからインドネシア、中国、日本への伝播と変容の跡をたどる。

サンスクリット:śaśa=ウサギ. śaśin=(ウサギをもつもの)月

1. パーリ語ジャータカ第316話

- 1) ウサギ(=菩薩), サル, ヤマイヌ, カワウソ.
- 2) インドラ神(帝釈天)がウサギの誠心を試す.
- 3) インドラ神はウサギの徳が人々の心に残るようにとその姿を月に描く.

2. 『大唐西域記』

- 1) インドに陸路で旅した唐の仏僧玄奘の記録. 7世紀前半. 第7巻「バーラーナシー国の条」
- 2) ウサギ, サル, キツネ. インドラ神がウサギを試みる. ウサギは死ぬ.

3. 『今昔物語』

- 1) 11末-12世紀初. 平安後期の説話集. 天竺・震旦・本朝の3部構成. 第5巻第13話.
- 2) ウサギ, キツネ, サル. ウサギは死ぬ.

4. ボロブドゥール寺院の浮彫

- 1) 760-860年頃. 中部ジャワ. シャイレーンドラ王朝が建設した大乘仏教寺院.
- 2) 6層の方形壇と3層の円形壇からなる段丘ピラミッド形式. 432体の仏像. 1300面の浮彫.
- 3) 第1回廊主壁下段, 欄楯上下段から第2回廊欄楯にかけて720面の前生話と譬喩経.
- 4) 第1回廊欄楯上段23-25面. サンスクリット『ジャータカマラー』第6話「ウサギ本生」.

参考図書(ウサギ本生物語に関するもの)

岩本裕『インドの説話』(初版1963. 復刻版1994. 紀伊國屋書店)インド起源の仏教・非仏教説話の日本とヨーロッパへの伝播を解説. 専門的だが読みやすい.

水谷真成・訳『大唐西域記』(中国古典文学大系第22巻. 平凡社, 1971年).

資料1 ボロブドゥール寺院の浮彫 (24面と25面)



資料2 今昔物語集巻第5

三の獸、菩薩道を行じ、兎身を焼くこと、第十三

今は昔、天竺に兎・狐・猿、三の獸有て共に誠の心を發して菩薩の道を行ひけり。

各思はく、「我等前世に罪障深重にして賤き獸と生れたり。此、前世に、生有る者を哀ばず、財物を惜しみて人に与へず。此くの如くの罪深くして地獄に堕ちて苦を久しく受けて残りの報にかく生れたる也。然れば此の度、此の身を捨てむ」。

年、我より老いたるをば祖(おや)の如くに敬ひ、年、我より少し進みたるをば兄の如くにし、年、我れより少し劣りたるをば弟の如く哀び、自らの事をば捨てて、他の事を前とす。

天帝尺(てんたいしゃく)、此れを見給ひて、「此等、獸の身也と云へども、有難き心也。人の身を受たりと云へども、或は生きたる者を殺し、或は人の財を奪ひ、或は父母を殺し、或は兄弟を讎敵(あたかたき)の如く思ひ、或は咲(ゑみ)の内にも悪しき思ひ有り、或は戀ひたる形にも嗔(いか)れる心深し。何に況(いはむ)や、此の如きの獸は、實の心深く思ひ難し。然れば試みむ」と思ひて忽に老たる翁の無力にして羸(つか)れ術無氣(ずつなげ)なる形に變じて、此の三の獸の有る所に至り給ひて宣はく、「我、年老ひ羸れて為む方無し。汝達、三の獸、我を養ひ給へ。我、子無く家貧しくて食物無し。聞けば、汝達、三の獸、哀みの心深く有り」と。

三の獸、此の事を聞きて云く、「此、我等が本の心也。速やかに養ふ可し」と云ひて、猿は木に登りて、栗・柿・梨子(なし)・棗・柑子・橘・[こくは]・椿・栗・郁子(むべ)・山女(あけび)等を取りて持て来り、里に出でては瓜・茄子・大豆・小豆・大角豆(ささげ)・粟・稗(ひえ)・黍(きび)等を取りて持て来りて好みに随ひて食せ令む。

狐は墓屋(つかや)の邊に行きて人の祭り置たる菜(しとぎ)・炊交(かしぎがて)・鮑(あはび)・鰹、種々の魚類等を取りて持て来りて思ひに随ひて食せ令むるに、翁既に飽満しぬ。

此の如くして日来を経るに、翁の云く、「此の二の獸は實に深き心有りけり。此、既に菩薩也けり」と云ふに、兎は勵(はげみ)の心を發して燈を取て、香を取りて、耳は高く偃(くぐせ)にして、目は大きに、前の足短かく、尻の穴は大きに開て、東西南北求め行けども、更に求め得たる物無し。

然れば猿・狐と翁と且(かつ)は耻ぢしめ、且は蔑づり咲ひて勵ませども力及ばずして、兎の思はく、「我、翁を養はむが為に野山に行くと云へども、野山怖しく破(わり)無し。人に殺され、獸に[くらは]るべし。徒に、心に非ず、身を失ふ事量無し。只如かじ、我今、此の身を捨てて、此の翁に食はれて永く此の生を離れむ」と思ひて、翁の許に行きて云く、「今、我、出でて甘美の物を求めて来らむとす。木を拾ひて焼(たき)て待ち給へ」と。

然らば猿は木を拾ひて来ぬ。狐は火取りて来りて焼(た)き付けて、若しやと待つ程に、兎、持つ物無くして来り。

其の時に猿・狐、此を見て云く、「汝何物をか持て来るらむ。此、思ひつる事也。虚言(そらごと)を以て人を謀(たばかり)て木を拾はせ火を焼せて、汝火を温まむとて、[あなに]く」と云へば、兎、「我、食物を求めて持て来るに力無し。然れば只我が身を焼きて食ひ給ふ可し」と云て、火の中に踊り入りて焼け死にぬ。

其の時に天帝釋(てんたいしゃく)、本の形に復して、此の兎の火に入りたる形を月の中に移して、普(あまね)く一切の衆生に見令めむが為に月の中に籠め給ひつ。

然れば月の面に雲の様な物の有るは此の兎の火に焼けたる煙也。亦、月の中に兎の有ると云は此の兎の形也。万の人、月を見む毎に此の兎の事思ひ出づ可し。

ブッダの生涯 ver 1.2 (2011-02-02)

ブッダ

- ・ ブッダ (buddha, 仏陀) : 悟った人
- ・ ムニ (muni, 牟尼) : 聖者
- ・ アラカン (arthat, 阿羅漢、羅漢) : 尊者
- ・ ボーディサットヴァ (bodhisattva, 菩薩) : 悟りを求める存在 (人)
- ・ シッダールタ : カピラヴァストゥにあった王国の太子。
ガウタマ氏 (うじ)。シャーキャ (釈迦) 族。
「ガウタマ・シッダールタ」「釈迦牟尼」「釈尊」
- ・ 仏教の物語
仏伝 : シッダールタ太子の生誕、出家、修行、成道、布教、入滅
ジャータカ (jātaka, 本生物語) : 前世の菩薩の物語 (パーリ語聖典では 547)

ブッダの八相

1. 下天 (げてん) (兜率天から白象の姿で降下) ⇒最後の「前世」。
2. 託胎 (たくたい) (マーヤーの胎内に入る)
3. 降誕 (ごうたん) (マーヤーの右脇から出生) ⇒「シッダールタ太子」として誕生。
4. 出家 (しゅっけ) (家族を捨てて修行に入る) 29 歳
5. 降魔 (ごうま) (菩提樹のもとで悪魔を降伏)
6. 成道 (じょうどう) (悟りを得る) 35 歳⇒ここまでは菩薩の段階。ここから仏陀の段階。
7. 初転法輪 (しょてんほうりん) (説法を開始)
8. 入滅 (にゅうめつ) (涅槃。一生を終える) 80 歳⇒輪廻転生から解放される。

八聖地

1. ルンビニー (誕生の地。ブッダの故郷の町はカピラヴァストゥ)
2. ラージャグリハ (王舎城。マガダ国の都)
3. ブッダガヤ (降魔成道の地)
4. ムリガダーヴァ (鹿野苑。初転法輪の地)
5. シュラーヴァスティー (舎衛城。コーサラ国の都。ブッダが神変を見せる)

千仏化現、双神変

6. サーンカーシャ (従三十三天降下の地)
7. ヴァイシャーリー (獼猴奉蜜《みこうほうみつ》)
8. クシナガラ (入滅の地)

参考 URL

「仏陀の生涯」 <http://www.eonet.ne.jp/~kotonara/budanosyougai.htm>